

川 辺 遺 跡

— 都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書 —

2015年10月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山県北部を西流する紀ノ川の下流域には、肥沃な和歌山平野が形成されています。この和歌山平野を中心とした地域には、太古から人々が生活を営んだ結果、数多くの遺跡が残され、発見されています。

本書は、都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴い、平成 26 年度に実施した和歌山市藤田に所在する川辺遺跡の発掘調査の成果を記載しております。

川辺遺跡は、紀ノ川右岸の沖積平野に位置しており、縄文時代以降の集落や墓などが発見され、中世にいたるまで交通の要衝として長期間にわたる人々の生活痕跡が発見されています。

今回の調査は平成 26 年度に実施され、平成 9・10 年度に発掘調査を実施した川辺遺跡 1 次調査の西側に隣接しています。

主な内容としては、中世後半から近世に至る水田面、鎌倉時代の水田面と古墳時代後期から鎌倉時代にかけての溝や土坑、古墳時代後期以前の東西に延びる浅い谷を発見しました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行に至るまで御協力いただいた関係諸機関ならびに地元の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 10 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 櫻井 敏雄

例 言

1. 本書は、和歌山県和歌山市藤田、川辺、日延に所在する川辺遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県（海草振興局建設部）の委託事業として和歌山県教育委員会による指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、和歌山県（海草振興局）が負担した。
4. 発掘調査及び出土遺物等整理業務にかかる体制は下記のとおりである。

発掘調査（平成 26 年度）		出土遺物等整理業務（平成 27 年度）
----------------	--	---------------------

事務局長（管理課長）	嶋田 文紀	米田 良博
埋蔵文化財課長	井石 好裕	土井 孝之
発掘調査業務担当	川崎 雅史	
整理業務担当		山本 光俊・小林 充貴

5. 現地での遺構の実測は、調査補助員の補助を得て発掘調査担当者が行った。写真撮影については、発掘調査担当者が行った。
6. 遺物の実測・トレースについては整理補助員が行い、遺物写真撮影は山本が行った。
7. 本書の執筆・編集は、山本・小林が分担して行った。
8. 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
2. 調査及び本書で使用した座標値は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした数値であり、値は m 単位で表記している。方位は座標北（G.N.）を用いた。
3. 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』（2010 年版）に拠り記述し、土質は調査担当者の任意の判断で行っている。
4. 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。
5. 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、14-01・145（2014 年度-和歌山市・川辺遺跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。
6. 本書に掲載した地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（平成 26 年 9 月 15 日現在）と、和歌山県海草振興局提供の都市計画図（1：2,500）に加筆して使用した。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	第Ⅳ章 調査成果
第1節 地理的環境……………1	第1節 基本層序……………5
第2節 歴史的環境……………1	第2節 遺構
第3節 既往の調査……………2	1 第1遺構面……………5
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	2 第2遺構面……………5
第1節 調査に至る経緯……………3	3 第3遺構面……………6
第2節 発掘調査の経過……………3	第3節 出土遺物……………10
第3節 出土遺物等整理作業の経過…3	第Ⅴ章 まとめ……………13
第Ⅲ章 調査の方法	報告書抄録
第1節 地区割の設定……………4	
第2節 調査の手順……………4	

挿図目次

図1 川辺遺跡周辺の遺跡分布図……………2	図8 第2遺構面遺構実測図（1）…8
図2 調査位置図……………2	図9 第2遺構面遺構実測図（2）…9
図3 地区割図（4m区画）……………4	図10 第3遺構面遺構分布図……………9
図4 基本層位……………5	図11 第3遺構面遺構実測図……………9
図5 第1遺構面遺構分布図……………7	図12 包含層出土遺物実測図……………10
図6 第1遺構面遺構実測図……………7	図13 遺構出土遺物実測図……………11
図7 第2遺構面遺構分布図……………7	

表目次

表1 出土遺物観察表（1）……………12	表2 出土遺物観察表（2）……………13
----------------------	----------------------

写真図版目次

写真図版1 検出遺構	1. 発掘調査前現況、2. 第1遺構面全景、3. 第1遺構面南 鋤溝
写真図版2 検出遺構	1. 第2遺構面全景、2. 遺構201断面、3. 遺構202断面
写真図版3 検出遺構	1. 遺構203、2. 遺構203断面、3. 遺構204－1断面
写真図版4 検出遺構	1. 遺構204－2断面、2. 遺構205 西壁断面、 3. 遺構207遺物出土状況
写真図版5 検出遺構	1. 遺構208遺物出土状況、2. 遺構214遺物出土状況、 3. 第3遺構面全景
写真図版6 検出遺構	1. 遺構307断面、2. 遺構321断面、3. 遺構323断面
写真図版7 出土遺物	
写真図版8 出土遺物	

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境

川辺遺跡が所在する和歌山市は和歌山県の北西部に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に隣接し、西は紀伊水道に面し紀淡海峡を挟んで兵庫県洲本市に隣接する。市域の中心には紀ノ川が西流しており、和歌山市を紀ノ川右岸と左岸に二分している。紀ノ川は、奈良県と三重県の県境に位置する大台ヶ原を源流とし、紀伊水道に注ぐ延長136kmの一級河川であり、運ばれてきた土砂により和歌山平野が形成されている。

川辺遺跡は、紀ノ川右岸に位置し、紀ノ川が形成した自然堤防と和泉山脈から流れる雄ノ山川の扇状地の末端もしくはその延長線上に展開している。遺跡の範囲は東西約1,000m、南北約650mで、付近の標高は11.0～13.0mを測り、周辺よりやや高い微高地となっている。古くから豊かな穀倉地帯であったが、一般国道24号和歌山バイパスの開通とともに、大規模商業施設が立ち並び急速に商用地や住宅地として開発されている。

第2節 歴史的環境（図1）

川辺遺跡は現在では和歌山市と岩出市の境近くに位置しており、古代では名草郡の東部、那賀郡との境付近に位置する。

川辺の名称が記録上に現れるのは古く、「日本書紀」安閑天皇二年五月（536年か）の条に諸国への屯倉設置のことが記されている。その中に紀国の「河辺屯倉」が見えており、おそらく「河辺」が広義の川辺を指すものと考えられ、川辺遺跡の付近に存在した可能性が考えられる。

この地域を考える上で欠かせないのが南海道である。平城京を起点として淡路・四国へと通じる古代の官道であり、経路については確定したものではないが、川辺遺跡の北に位置する山口遺跡南側の和歌山市立山口小学校付近を通り、紀伊国府の所在していた府中へと西走していたと考えられる。この南海道は、平安京への遷都に伴い経路が変更されており、新たに大阪南部から雄ノ山峠を越えて紀伊へと入る経路が設定され、山口遺跡付近が紀伊国の入り口に位置することになる。

古代末から中世にかけて熊野詣が盛んになると雄ノ山峠を越えてから西折するのではなく、南下して川辺へと向かうコースの利用が頻繁となる。いわゆる熊野街道として知られる道である。「後鳥羽院熊野御幸記」にも「次参山口王子、次参川辺王子云々」とあり、川辺は紀ノ川左岸のはんざき吐前村へと向かう渡河地として重要な地点であり、交通の要衝であった。

川辺遺跡の周辺には、北には弥生時代後期から中世にかけて断続的に栄える山口遺跡（2）、飛鳥時代の寺院として知られる県指定史跡の山口廃寺跡（指1）と上野廃寺跡（指2）、丘陵上に古墳が築造されることが多い紀ノ川流域において数少ない平野部に築かれた藤田古墳（3）、弥生時代から奈良時代の集落遺跡である吉田遺跡（4）が所在する。西には弥生時代から奈良時代の集落遺跡である宇田森遺跡（5）、紀ノ川右岸の自然堤防上には紀ノ川流域を代表するような集落遺跡である西田井遺跡、田屋遺跡などが連なっている。川辺遺跡の範囲内には県指定史跡の川辺王子跡（指3）が所在する。南には紀ノ川が西流しており、川辺遺跡の南西方向には国指定特別史跡の岩橋千塚古墳群が所在する。

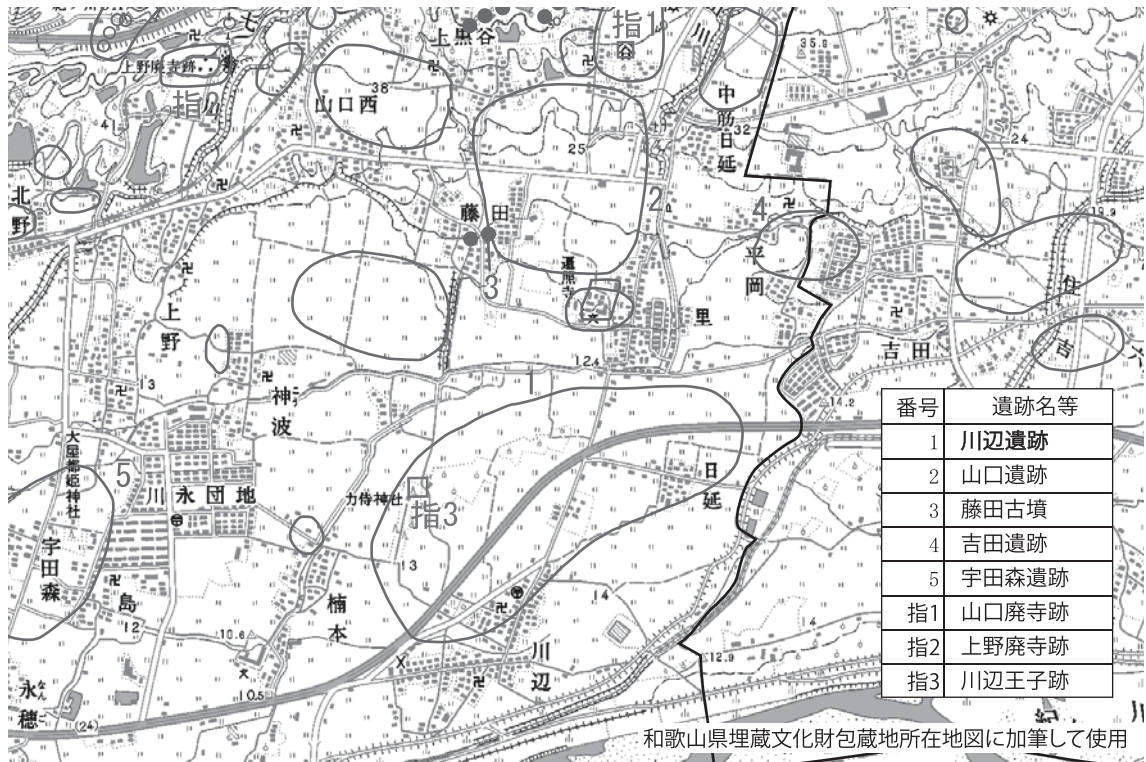


図1 川辺遺跡周辺の遺跡分布図

第3節 既往の調査(図2)

川辺遺跡では、これまで国道・県道や住宅・商用地施設の建設に伴い、和歌山県文化財センターや和歌山市都市整備公社(現:和歌山市文化スポーツ振興財団)、和歌山市教育委員会等により、数多くの発掘調査が実施されている。

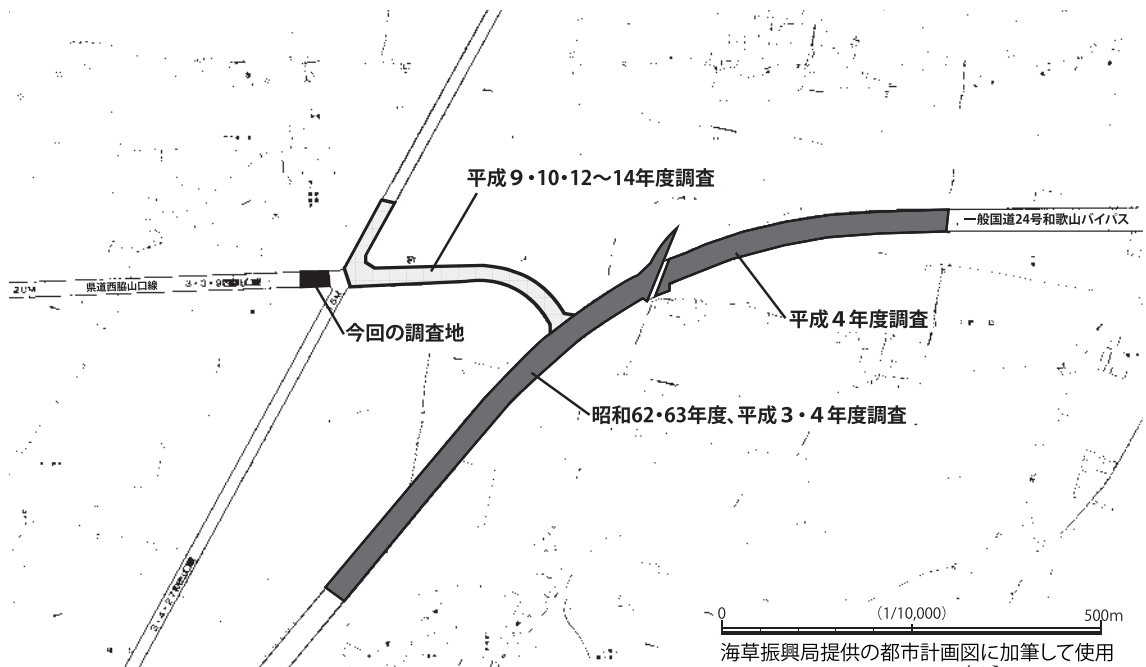


図2 調査位置図

和歌山県文化財センターでは、一般国道24号和歌山バイパスと県道和歌山貝塚線の工事に先立ち、発掘調査を実施している。

調査では、縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代から古墳時代にかけての集落や前方後方形の周溝墓、古代の掘立柱建物や道路状遺構、中世の掘立柱建物などが数多く見つかっている。これらから、川辺遺跡は縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡であることが明らかになっており、集落や墓地などの位置も、時代によって変遷していることが窺える。

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地である川辺遺跡の範囲（和歌山市藤田地内）において、都市計画道路西脇山口線道路建設事業が計画され、平成26年5月に県文化遺産課が確認調査を実施した。確認調査は7本のトレンチを設け、合計127.96㎡の範囲で行った。調査の結果、対象地の東側で古墳時代後期・飛鳥時代から中世にかけての2面または3面の遺構面が存在していることが明らかになった。一方、対象地の西側は、深く掘削されて産業廃棄物の埋立てが行われ、遺構面が破壊されていた。これらの結果から、対象地の東側部分について本発掘調査を実施する運びとなった。

第2節 発掘調査の経過

本発掘調査は、「都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡発掘調査業務」として、平成26年9月30日に和歌山県（海草振興局建設部）と契約を行い、事業に着手した。発掘調査は、「川辺遺跡発掘調査工事」として株式会社宮尾組が工事を請負、平成26年10月29日から平成27年2月13日までの工期で実施した。また、発掘調査に伴う基準点測量は、「川辺遺跡発掘調査に伴う基準点測量委託業務」として、平成26年10月29日から11月28日の工期で株式会社南紀航測センターに業務を委託した。契約時の調査面積は864㎡であったが、調査区北側の歩道部分が調査対象外となり、最終的な調査面積は820㎡である。

第3節 出土遺物等整理作業の経過

整理作業は、遺物収納コンテナ（容量28L）8箱分の土器類について行った。

遺物全点を対象に洗浄作業を行った後、登録作業は取り上げた袋単位毎に出土遺物登録番号を与えている。基本的に発掘調査での取り上げ日の若い順から遺物を登録している。また、遺物内容を確認して一覧表を作成した。注記作業は調査コード（14-01・145）と登録作業で与えた出土遺物登録番号を記入した。その後、遺物の接合、補強、復元作業を行い、遺物を県教育委員会に移管するために遺物収納コンテナに再整理し、収納とともにコンテナ側面に必要事項を記載したシールを張り付けた。

遺物への注記以降の作業と並行して、遺物実測、遺物・遺構トレースを行い、これらをレイアウトして図面原稿を作成した。

調査現場で撮影した遺構等の写真は収納・登録作業を行った。また、報告書掲載遺物についてはデジタルカメラを用いて撮影し、主要な遺構写真とともにレイアウトし、写真図版を作成した。

掲載遺物については、遺物観察表を作成し、一連の作業を踏まえて原稿執筆を行った。

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 地区割の設定（図3）

既往の調査では、日本測地系を基準とした地区割が行われていたが、今後、川辺遺跡の範囲内で継続して調査が行われることが予想できることから、世界測地系を使用した地区割を行った。また、今回の調査区が東西100m、南北100mの一つの中区画内に収まることから、中区画名は用いず、遺物の取り上げについては小区画名でのみで行っている。地区割は、今回の調査区の範囲を網羅する北東（ $X = -192400\text{m}$ 、 $Y = -67800\text{m}$ ）

に基点を設け、北東隅をa1地

点として、そこから4mずつ西方向へb～y、南方向へ2～25とそれぞれの方向に25分割し、一辺4mの正方形区画を小区画とする。区画名は北東隅の地区名からa1区～y25区と呼称する。

なお、世界測地系と日本測地系との現地付近での誤差については、基点とした（ $X = -192400\text{m}$ 、 $Y = -67800\text{m}$ ）が日本測地系では（ $X = -192747.3748\text{m}$ 、 $Y = -67538.5203\text{m}$ ）となる。

第2節 調査の手順

記録保存を要する遺構面は、北側が3面、南側が2面で、3面調査する範囲を調査区1-1区、2面調査する範囲を調査区1-2区として調査を進めたが、調査区全体に1・2・3面の遺構が存在することが明らかになった。また、調査区の南に隣接する畑への進入路を確保するため、先に南東部の一部を残して調査を行い、その後進入路部分の調査を行った。

現地作業は11月中旬から開始し、まず表土等を重機によって掘削した後、各遺構面まで人力により掘削し、遺構検出・掘削、全景写真撮影等を行った。第1面の全景写真は12月6日、第2面の全景写真は1月14日、第3面の全景写真は1月29日に撮影している。また、進入路部分については2月上旬に調査を行った。

記録作業としては、平面実測図（ $S = 1/20$ ）、遺構配置図（ $S = 1/100$ ）、調査区壁面土層図（ $S = 1/20$ ）、各遺構平面・断面図（ $S = 1/10 \cdot 1/20$ ）などがあり、方眼紙（A2）に作成している。写真は4×5判モノクロ・リバーサル、6×7判モノクロ・リバーサル、35mm判モノクロ・リバーサル、デジタルカメラを用いて撮影した。全景写真は撮影用足場を組んで撮影している。

基準点測量は、世界測地系を座標値とする4級基準点1点と引照点1点をGPS観測において公共測量作業規程に準じて調査区に隣接する箇所に設置した。水準点の標高の基準は、国道24号沿いに設けられた2級基準点（H16-21）を用い、今回新設した4級基準点までの路線において

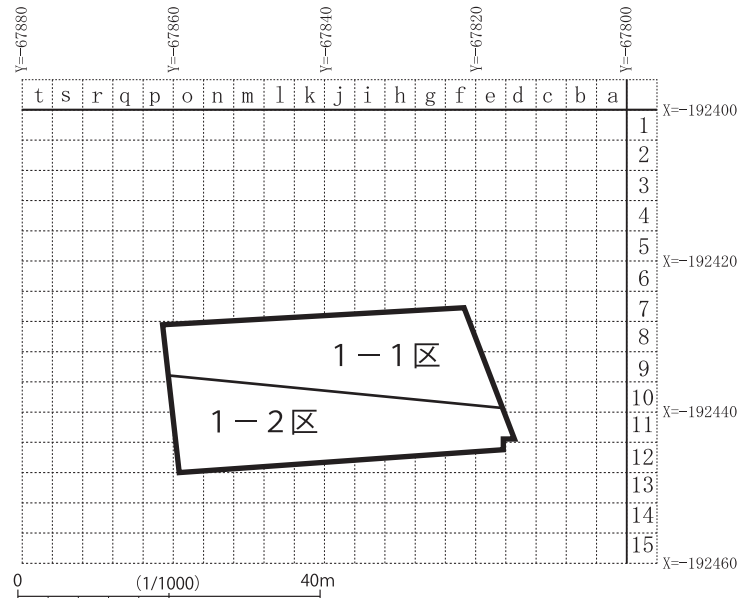


図3 地区割図（4m区画）

観測を行っている。

調査で用いた遺構名は、3ケタの数字で表記している。3ケタ目が遺構面を表し、第1面が101～、第2面が201～、第3面が301～とした。また、下2ケタは遺構種別に係らず、それぞれの面で検出された順番に遺構名を付している。

第IV章 調査成果

第1節 基本層序 (図4)

基本層位は、形成過程や色調・土質などから7つの層に大別して第1層～第7層とし、さらに細分して枝番を与えている。

第1層：現在の耕作土（1-1）・床土（1-2）である。

第2層：2-1は灰白色、2-2はにぶい黄色を呈するシルト層で、マンガン粒・鉄分を含む。層位は水平に形成されており、近世以降の水田耕作土と床土に相当すると考えられる。

第3層：灰黄色～灰オリーブ色を呈するシルト層で、3～4層に細分可能である。中世の土師器や瓦器などが出土し、3-1・3-2層はマンガン粒が多く含む。層位は水平に形成されており、中世の水田耕作土に相当すると考えられる。

第4層：にぶい黄褐色を呈するシルト層で、硬く締まっている。古墳時代後期から飛鳥時代の遺物が出土する。

第5層：黄褐～暗褐色を呈するシルト層で、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物が出土する。

第6層：黄褐色を呈するシルト層で、遺物は出土しない。

第7層：粗砂礫層で南側では高い位置で確認できる。上面の凹凸が激しく、それに合わせて第6層の厚さも変化している。

遺構検出は、第3層上面、第4層上面、第6層上面でおこなっており、上位から第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面としている。

第2節 遺構

1 第1遺構面 (図5・6、写真図版1)

中世後半から近世の水田面で、南東部は約20cm高くなり、段差があったことが窺える。

遺構 101～103 調査区全体で検出されている耕作に伴う鋤溝と同軸方向の溝である。鋤溝の軸方向は現在の水田畦畔と同じで、大半が東西方向に延びているが、西端で南北方向の鋤溝も検出している。方向が異なっているのは、水田区画の違いに起因すると考えられる。

2 第2遺構面 (図7～9、写真図版2～5)

鎌倉時代の水田面であるとともに、古墳時代後期から鎌倉時代にかけての生活面と考えられる。南東部には、第1遺構面と同じく段差が存在し、一段高くなっている。検出した遺構には、鎌倉

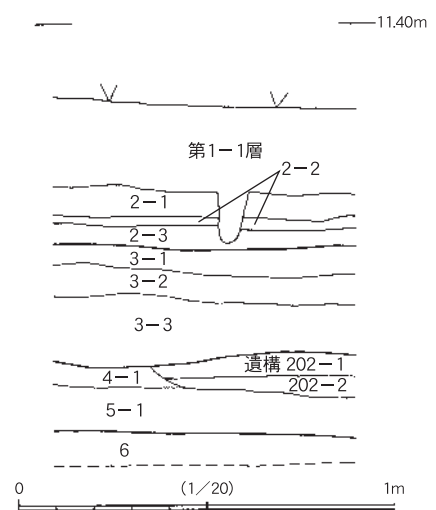


図4 基本層位

時代の水田耕作に伴う鋤溝や土坑、古代と考えられる溝・土坑などがある。

・鎌倉時代の遺構

遺構 207 南東隅の一段高い場所で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.50m、短軸 1.25m、深さ 1.10mを測る。ほぼ垂直に落ち込むことから素掘り井戸の可能性もある。遺物は鎌倉時代前期の瓦器や土師器、瓦質土器などが出土する。当時の食器類が一揃い出土しており、完形品も多くあるのが特徴である。

遺構 213・214 南東部で検出した土坑で、平面形状は円形を呈する。遺構 213 は直径 0.80m、深さ 0.10m、遺構 214 は直径 1.00m、深さ 0.15mを測る。断面形状は舟底状を呈する。遺物は瓦器碗等が出土する。

・古代の遺構

遺構 201 調査区の東寄りを南北に延びる溝で、延長 8.7m以上、幅 0.55～0.85m、深さ 0.4mを測る。遺構 202・203 と重複し、両遺構よりも古い。遺物は土師器・須恵器が出土する。南側は途切れるものの、遺構 209 と一連の溝になる可能性がある。

遺構 202 調査区中央付近を東西に縦断する溝で、延長 42m以上、幅 0.40～1.10m、深さ 0.10～0.20mを測る。断面の形状は基本的に舟底状であるが、部分的に深く掘削された箇所がある。遺物は須恵器等が出土する。

遺構 203・212 調査区の北側を東西に走る溝で、幅 3m前後、深さ 0.10～0.25m、延長 40m以上を測る。中央付近で大型土坑の遺構 204 と重なる。また、重なるように延びる遺構 212 は、埋土の堆積状況から遺構 203 と同時期に埋没していると考えられる。遺構 203 西側では、底部に小ピットが多数存在する。遺物は土師器・須恵器が出土する。

遺構 204 調査区中央北寄りに位置する大型土坑である。北側が調査区域外のため全容は明らかでないが、規模は東西約 15m、南北 9m以上、深さ 0.40mを測る。底はほぼ平坦で、底直上には硬く締まった礫層が形成されている。平面形状は不定形で、再掘削を行っている可能性がある。遺物は土師器・須恵器が出土する。

遺構 205 調査区の中央付近から遺構 202 と平行するように西側に伸びる溝で、長さ 25.5m以上、幅 1.10～1.50m、深さ 0.55mを測る。断面形状は逆台形を呈する。遺構 204 と重なるが前後関係は明らかでない。遺物は土師器・須恵器が出土する。

遺構 208 調査区南東部で検出した土坑で、南端は調査区域外となる。長さ 5m以上、幅 1.00～2.15m、深さ 0.15mを測る。底は平坦で、遺物は須恵器が出土する。

3 第3遺構面（図 10・11、写真図版 5・6）

調査区全体が、自然地形である東西に延びる浅い谷で、肩部や底付近で不定形の土坑などを検出した。

遺構 307 調査区中央東寄りで検出した不整楕円形を呈する土坑で、長軸 3.00m、短軸 0.80～1.10m、深さ 0.15mを測る。断面形状は舟底状で、遺物は須恵器が出土する。

遺構 321 遺構 307 の西側で検出した楕円形を呈する土坑で、長軸 2.60m、短軸 0.75m、深さ 0.15mを測る。断面形状は舟底状を呈する。

遺構 323 調査区の北東部で検出した不整円形を呈する土坑で、長軸 0.70m、短軸 0.70m、深さ 0.20mを測る。断面形状は箱形を呈し、遺物は土師器が出土する。

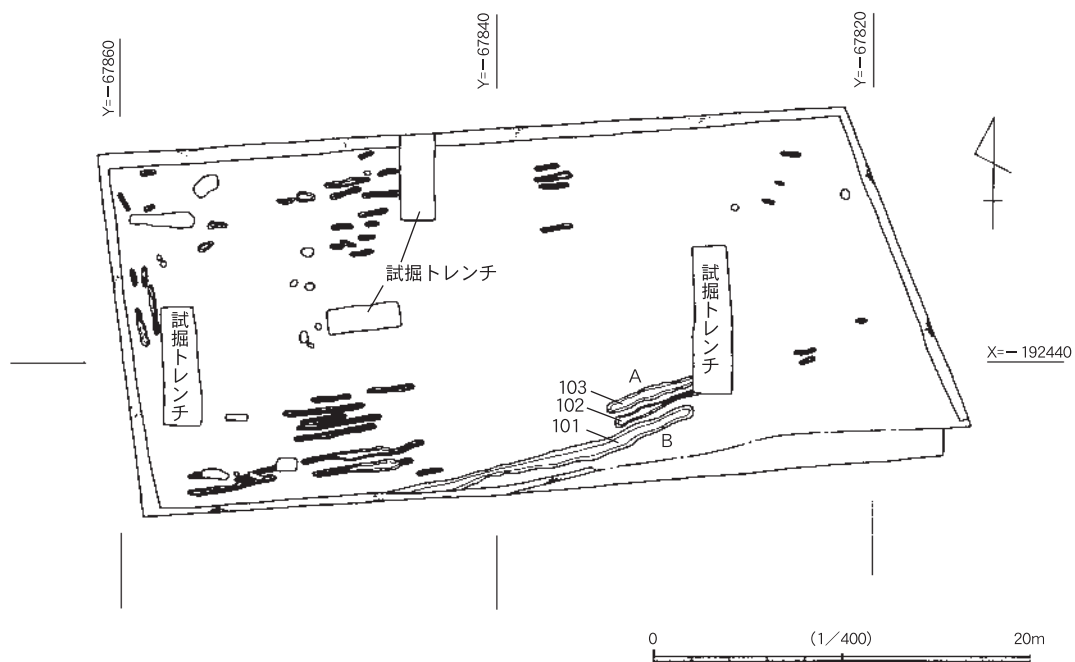


図5 第1遺構面遺構分布図

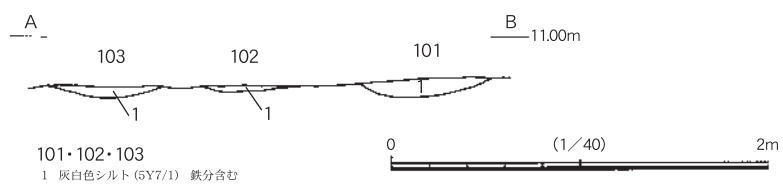


図6 第1遺構面遺構実測図

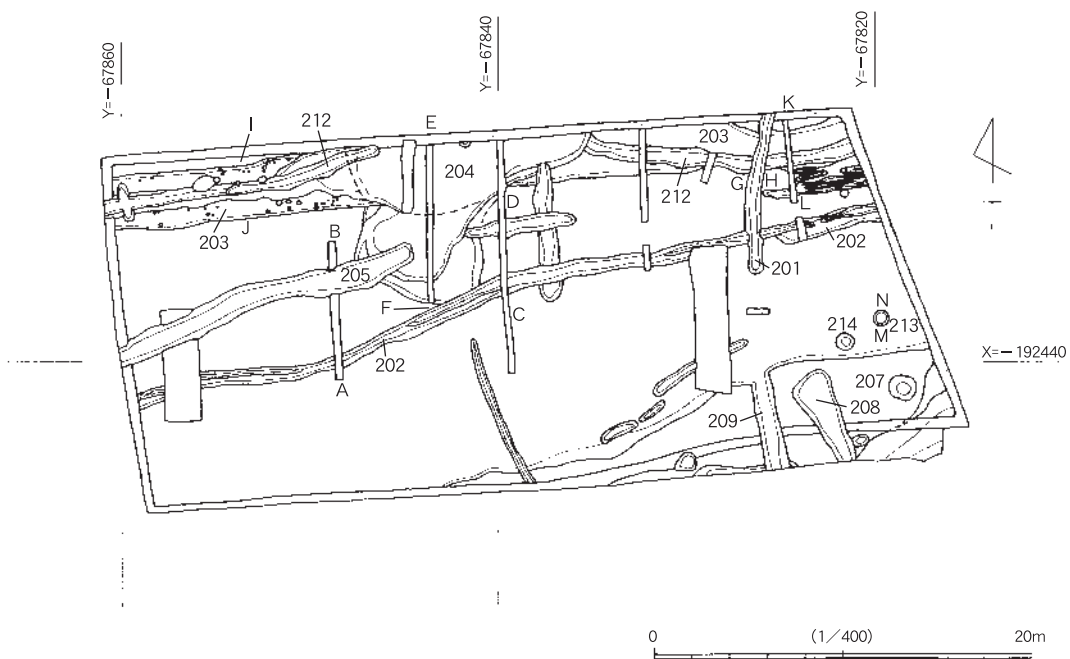
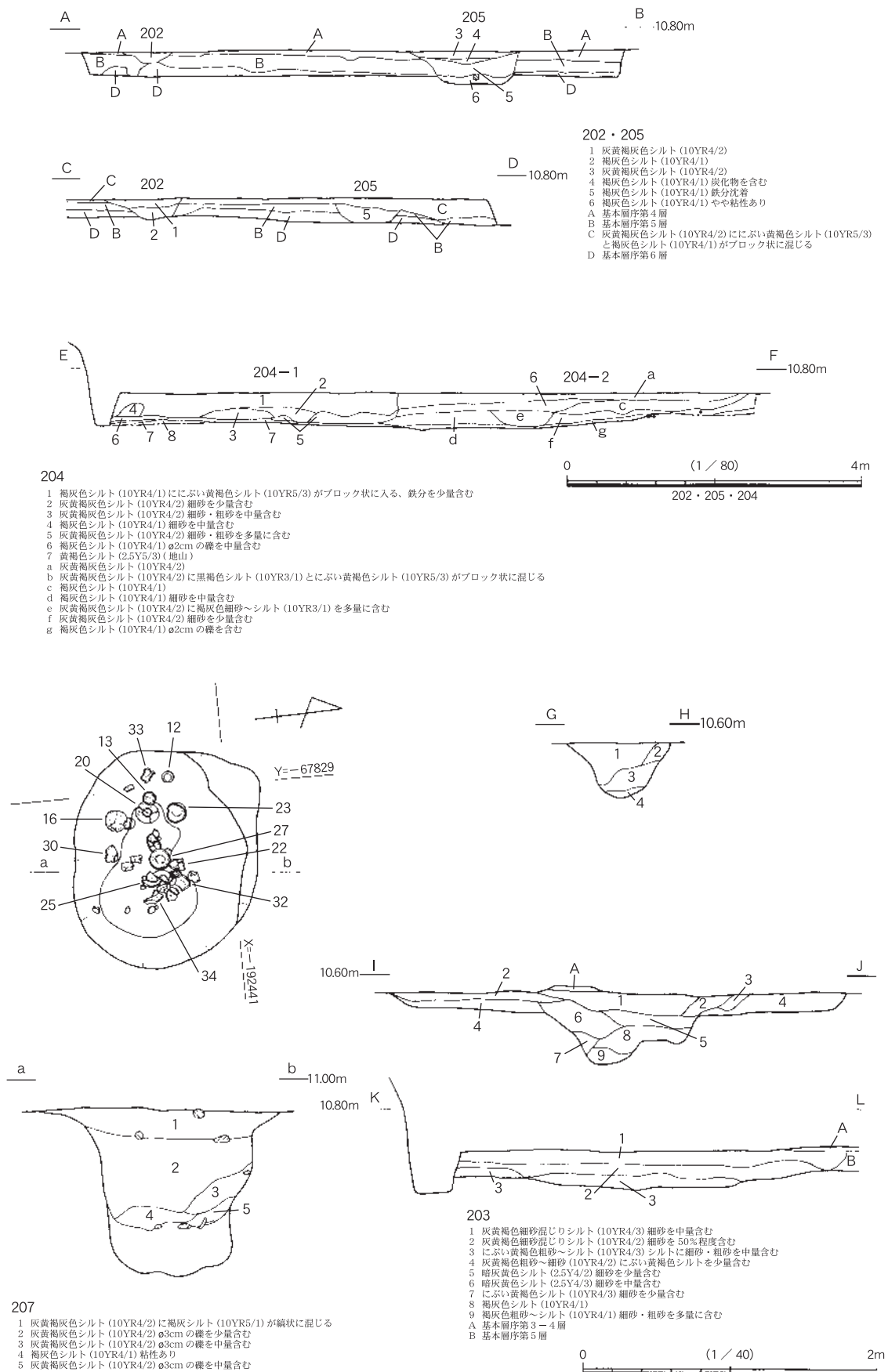


図7 第2遺構面遺構分布図



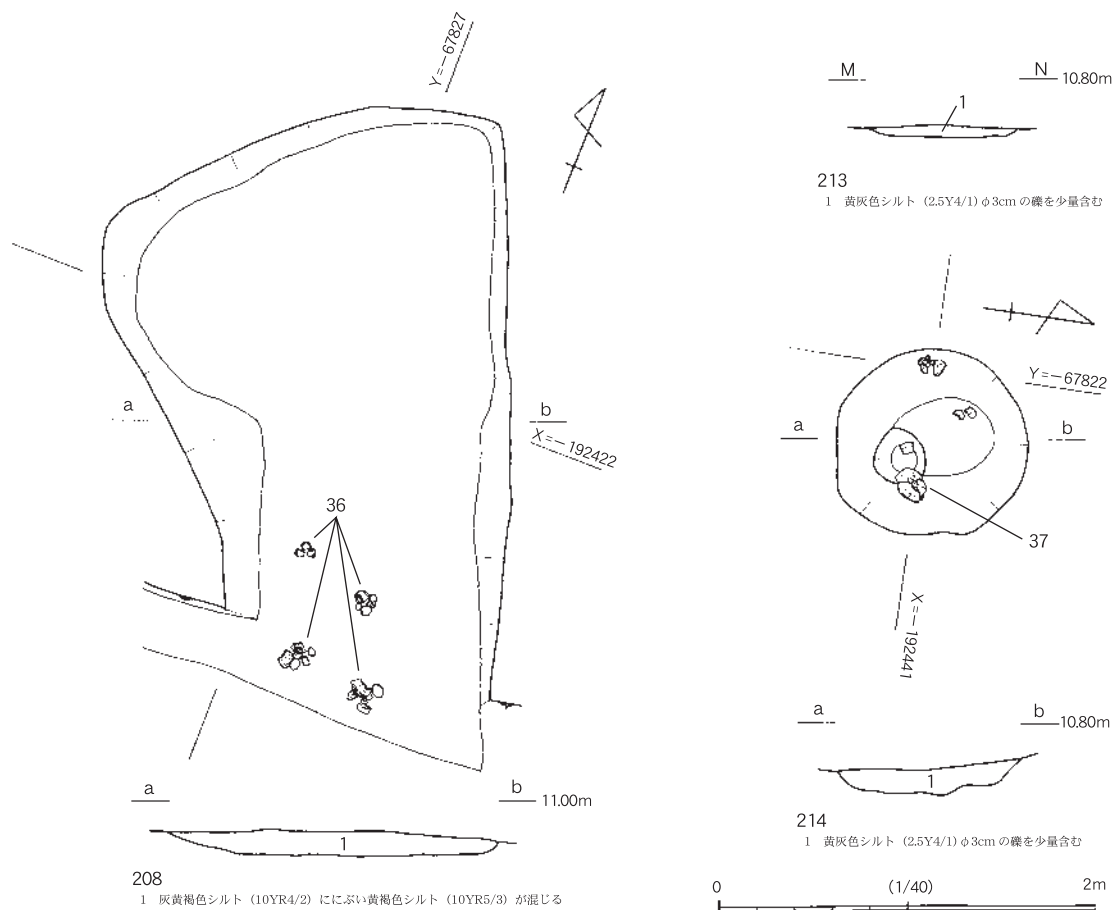


図9 第2遺構面遺構実測図(2)



図10 第3遺構面遺構分布図

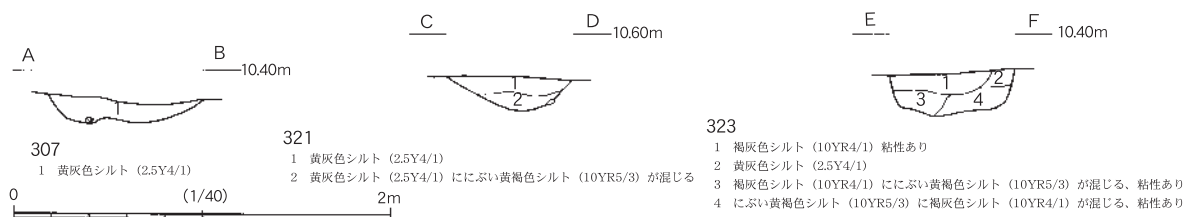


図11 第3遺構面遺構実測図

第3節 出土遺物（図12・13、表1・2、写真図版7・8）

出土した遺物は、これまでの川辺遺跡での調査に比べて比較的少なく、遺物収納コンテナにして8箱である。遺物には弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器等があり、調査区南東部から多く出土している傾向がある。出土遺物の大半は中世の時期である。

包含層出土遺物 土師器・瓦器が多く、少量ではあるが須恵器が出土している。大半の遺物は細片であるが、比較的形のわかる7点を実測している。1は土師器小皿、2・6は土師器土釜、4は瓦器椀が中世の遺物として第3層又は第1遺構面精査時に出土している。3は須恵器甕、5は須恵器坏蓋、7は須恵器甕が古代の遺物として第2遺構面下の第4・5層から出土している。

第1遺構面の遺構からは、中世の瓦器や少量の土師器が出土しているが、細片のみで形になるものは少ない。出土遺物の半数以上、実測した遺物の8割は第2遺構面の遺構からである。

遺構 201・203 8は須恵器高坏で、遺構 201 と遺構 203 が重複する位置から出土している。遺構 201 からは、古代の須恵器・土師器が少量出土しており、須恵器よりも土師器の方が多く出土している。

遺構 202 9は須恵器坏蓋で、これ以外は少量の土師器が出土している。

遺構 203 10は須恵器甕で、出土遺物の大半は土師器の細片であるが、少量ながら須恵器や瓦器椀の破片が出土している。

遺構 207 11～17の7点は土師器であり、そのうち11～14の4点は小皿、15～17の3点は皿である。18～32の15点は瓦器であり、そのうち18・19の2点は小皿、20～32の13点は椀である。33・34は土師器土釜、35は東播系須恵器捏鉢である。土師器と瓦器が多く出土しており、遺構の底から多量に出土し、14・15・26の3点は底から出土している。しかし、遺構の底から0.3mの位置からも多量に出土し、遺物は比較的接合が可能な物が多い。11～13・16・18・20・22・23・25・27・29・30・32～34の15点はこの位置から出土している。

遺構 208 36は須恵器壺で、遺構内に4ヶ所に分かれるような形で出土した。欠損している部分もあるが、1個体の土器を4ヶ所に分けて置いたと思われることから、祭祀等に関係する可能性が考えられる。

遺構 214 37は瓦器椀で、土師器と瓦器が主に出土している。

第3遺構面の遺構は須恵器や土師器が少量出土しているが、細片のみで形になるものは少ない。

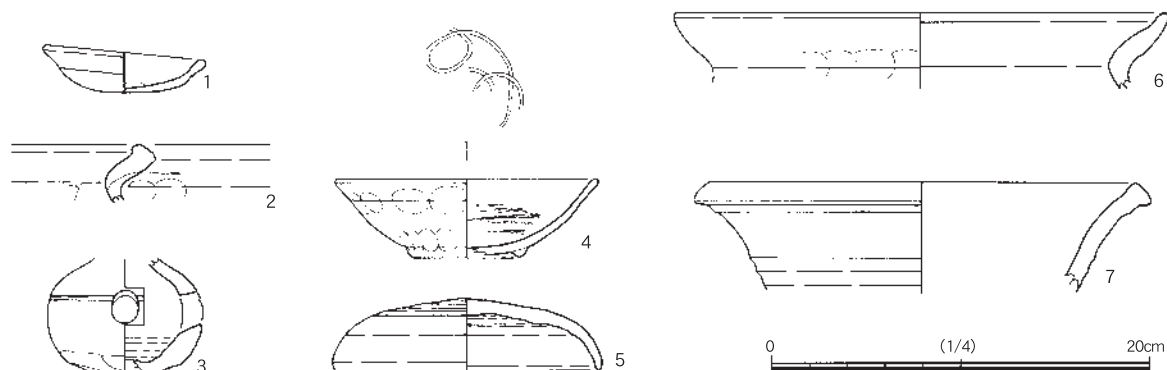


図12 包含層出土遺物実測図

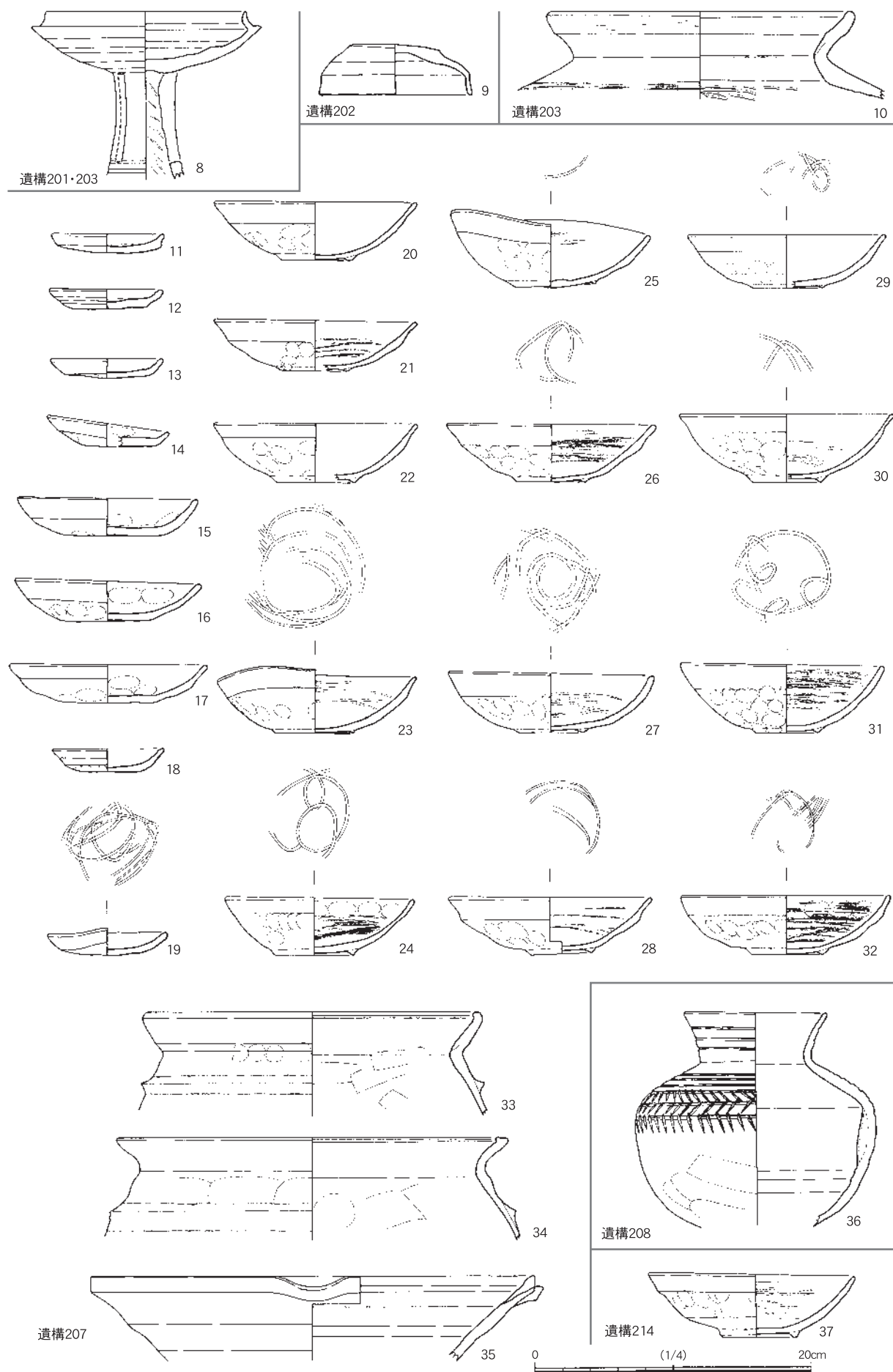


図13 遺構出土遺物実測図

表1 出土遺物観察表(1)

報告書 番号	図版番号	実測図 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法	備考
1	図版7	28	土師器 小皿	e9	精査第1面	(8.4)	1.7~2.5	6.8	50%	内) 2.5Y7/1灰白~7.5YR7/6橙 外) 2.5Y6/1黄灰~7.5YR6/6橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	一部反転復元
2	図版7	15	土師器 土釜	k12	精査				5%以下	内) 10YR7/4にふい黄橙 外) 10YR7/3にふい黄橙~10YR6/3にふい黄橙 断) N3/0暗灰	内面~口縁部にかけてヨコナデ、外面頸部はユビオサエ+ナデを施す。	
3	図版7	33	須恵器 甕	o11+n10	第3層 4・5層	最大径 (8.1)	(5.0)	(3.5)	30%	内) 5Y8/1灰白 外) 7.5Y7/1灰白 断) 5Y8/1灰白	内面~外面体部に回転ナデ、外面底部は荒いナデを施す。体部に凹線文を1条、直径約1.5cmの孔が上から下に向けて穿孔されている。	反転復元
4	図版7	23	瓦器 椀	h11	第3層	(13.8)	4.1	高台径 (5.6)	45%	内) 7.5Y8/1灰白~N5/0灰 外) 7.5Y8/1灰白~N3/0暗灰 断) 7.5Y8/1灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.1~0.2cmのヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	反転復元
5	図版7	29	須恵器 坏蓋	g8	4・5層	(13.7)	3.8		30%	内) N6/0灰 外) N7/0灰白 断) N6/0灰	内面~外面体部にかけて回転ナデ、外面天井部は右回りの回転ヘラズリを施す。	一部反転復元
6	図版7	14	土師器 土釜	h8	第3層	(25.7)	(4.0)		5%以下	内) 10YR6/3にふい黄橙 外) 10YR6/4にふい黄橙 断) 2.5Y7/2灰黄	頸部はくの字に屈曲。内面は工具によるナデ、口縁部はヨコナデ、外面は頸部がユビオサエ+ナデを施す。	反転復元
7	図版7	12	須恵器 甕	g+h8+9	4・5層・礫層	(22.2)	(5.8)		20%	内) 2.5Y6/1灰黄~5YR5/1褐灰 外) N6/0灰~N4/0灰 断) 2.5YR5/2灰赤	内面~外面にかけて回転ナデを施す。口縁端部~内面にかけて自然釉付着。	反転復元
8	図版7	35	須恵器 高坏	g+h8+9	201・203 4・5層・礫層	(14.3)	(12.1)		40%	内) N6/0灰 外) N6/0灰 断) 5YR4/1褐灰~N4/0灰	杯部内面~外面体部は回転ナデ、外面底部~脚部は回転ヘラズリを施す。脚部に3ヶ所に幅約0.5cmの長方形透かし、下部に凹線文を2条施す。	反転復元
9	図版7	3	須恵器 坏蓋	j9	202	10.8	3.7		90%	内) N8/0灰白 外) 5Y7/1灰白 断) 5Y8/1灰白 釉) 10Y3/2オリブ黒	内面~外面体部にかけて回転ナデ、外面天井部はヘラ切り後にナデ調整か。外面天井部~体部に自然釉付着。	
10	図版7	11	須恵器 甕	n8	203	(21.4)	(6.3)		10%	内) 2.5Y6/2灰黄~2.5Y7/2灰黄 外) 2.5Y6/2灰黄~5YR6/4にふい橙 断) 5YR6/6橙~7.5YR5/3にふい褐	頸部はくの字に屈曲。内面は同心円文の当て具痕、口縁~外面頸部は回転ナデ、外面体部にタタキ後にカキメを施す。	反転復元
11	図版7	13	土師器 小皿	e11	207	8.0	1.4	7.4	90%	内) 7.5YR7/6橙 外) 7.5YR7/6橙 断) 7.5YR7/6橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	一部反転復元
12	図版7	1	土師器 小皿	e11	207	8.0	1.4	6.2	98%	内) 7.5YR6/4にふい橙~7.5YR5/2灰褐 外) 5YR6/6橙~7.5YR5/3にふい褐 断) 5YR6/6橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	
13	図版7	2	土師器 小皿	e11	207	8.0	1.5	6.2	100%	内) 10YR5/1褐灰~10YR5/2灰黄褐 外) 10YR5/2灰黄褐 断) 7.5YR6/4にふい橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。底部に直径約2cmの円形圧痕。	
14	図版7	30	土師器 小皿	e11	207完掘	(8.8)	1.1~2.2	7.0	60%	内) 10YR8/3浅黄橙 外) 5YR6/6橙~7.5YR7/3にふい橙 断) 7.5YR6/6橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。形状のひずみ有。	一部反転復元
15	図版7	18	土師器 皿	e11	207	(12.8)	2.7	6.0	60%	内) 10YR7/2にふい黄橙~10YR5/2灰黄褐 外) 10YR8/3浅黄橙 断) 10YR8/3浅黄橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	一部反転復元
16	図版7	20	土師器 皿	e11	207	13.2	2.9	6.7	95%	内) 10YR8/4浅黄橙 外) 5YR7/4にふい橙~10YR7/3にふい黄橙 断) 5YR7/4にふい橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	
17	図版7	36	土師器 皿	e11	207	(14.0)	2.8	(6.7)	30%	内) 7.5YR7/4にふい橙 外) 7.5YR7/4にふい橙 断) 7.5YR7/4にふい橙	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	反転復元
18	図版7	6	瓦器 小皿	e11	207	8.0	1.7		98%	内) N4/0灰~N8/0灰白 外) N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内外両面とも底部~体部にかけてユビオサエ+ナデ、口縁部はヨコナデを施す。	
19	図版7	27	瓦器 小皿	e11	207	8.5	1.5~2.0	6.5	98%	内) N5/0灰~N4/0灰 外) N5/0灰~N4/0灰 断) N7/0灰白	内面は幅0.1~0.25cmのヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。	
20	図版7	7	瓦器 椀	e11	207	14.4	4.2	高台径 5.2	98%	内) N3/0暗灰 外) N3/0暗灰~N8/0灰白 断) N8/0灰白	内面は磨滅のため調整不明瞭、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	
21	図版7	37	瓦器 椀	e11	207	(14.4)	3.6	高台径 (4.6)	50%	内) N3/0暗灰 外) N6/0灰~N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.15cmのヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にナデを施す。	反転復元
22	図版8	34	瓦器 椀	e11	207	(14.6)	4.2	高台径 (5.6)	40%	内) N8/0灰白~N3/0暗灰 外) N5/0灰~N4/0灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のため調整不明瞭、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	反転復元
23	図版8	8	瓦器 椀	e11	207	14.2	4.1~4.6	高台径 5.5	98%	内) N4/0灰~5Y8/1灰白 外) N4/0灰~5Y8/1灰白 断) N8/0灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.1~0.3cmのやや粗いヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。形状のひずみ有。	
24	図版8	21	瓦器 椀	e11	207	13.5	4.1	高台径 5.7	70%	内) N5/0灰 外) N8/0灰~N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のみ、幅0.1~0.25cmのやや密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	
25	図版8	22	瓦器 椀	e11	207	14.2	3.8~5.6	高台径 5.6	60%	内) N3/0暗灰 外) N8/0灰白~N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.1~0.15cmのヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。形状のひずみ有。	
26	図版8	24	瓦器 椀	e11	207完掘	14.9	4.2	高台径 5.0	80%	内) N8/0灰白~N3/0暗灰 外) N8/0灰白~N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のみ、幅0.15~0.2cmの密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	
27	図版8	9	瓦器 椀	e11	207	14.7	4.2	高台径 4.8	98%	内) N3/0暗灰~N7/0灰白 外) N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.1~0.3cmのやや粗いヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	
28	図版8	10	瓦器 椀	e11	207	(14.6)	4.1	(4.4)	25%	内) N4/0灰~N7/0灰白 外) N3/0暗灰~N8/0灰白 断) N8/0灰白	内面は磨滅のため不明瞭、幅0.1~0.3cmのやや粗いヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。高台が中心からずれている。	反転復元
29	図版8	26	瓦器 椀	e11	207	(14.2)	3.8	高台径 (5.0)	45%	内) N8/0灰白~N3/0暗灰 外) N8/0灰白~N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.2cmのヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にナデを施す。	反転復元
30	図版8	25	瓦器 椀	e11	207	(15.3)	4.9	高台径 5.0	20%	内) N3/0暗灰 外) 5Y7/1灰白~N3/0暗灰 断) N8/0灰白	内面は磨滅のためやや不明瞭、幅0.2~0.3cmのやや密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部~底部にかけてユビオサエ+ナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	反転復元

表2 出土遺物観察表(2)

報告書 番号	図版番号	実測図 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法	備考
31	図版8	32	瓦器 椀	e11	207	14.5	4.9	4.4	80%	内) N8/0灰白～N5/0灰 外) N8/0灰白～N4/0灰 断) N8/0灰白	内面は磨減ぎみ、幅0.15～0.25cmの密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部～底部にかけてユビオサエナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。	
32	図版8	19	瓦器 椀	e11	207	14.9	4.2	高台径 5.1	95%	内) 7.5Y8/1灰白～N4/0灰 外) 7.5Y8/1灰白～N4/0灰 断) 7.5Y8/1灰白	内面は磨減ぎみ、幅0.1～0.2cmの密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部～底部にかけてユビオサエナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。外面に重ね焼痕。	
33	図版8	4	土師質 土釜	e11	207	(23.8)	(7.5)		15%	内) 5YR6/4にふい橙～7.5YR5/4にふい褐 外) 7.5YR4/2灰褐～5YR6/4にふい橙 断) 7.5YR5/4にふい褐	頸部はくの字に屈曲、鐙は貼付け。内面は工具によるナデ、口縁部はヨコナデ、外面は頸部がユビオサエ、体部が工具によるナデを施す。	反転復元
34	図版8	5	土師質 土釜	e11	207	(28.0)	(7.4)		10%	内) 5YR6/4にふい橙 外) 10YR5/2灰黄褐～N2/0黒 断) 5YR6/4にふい橙	頸部はくの字に屈曲、鐙は貼付け。内面は工具によるナデ、口縁部はヨコナデ、外面は頸部がユビオサエ、体部が工具によるナデを施す。外面口縁～頸部にスス付着。	反転復元
35	図版8	31	須恵器 (東播系) 捏鉢	e11	207	(31.8)	(6.1)		10%	内) N7/0灰白 外) N7/0灰白～N6/0灰 断) N7/0灰白	内面～外面にかけて回転ナデを施す。口縁端部に自然釉付着。	反転復元
36	図版8	17	須恵器 壺	e11 f*gl1	208	(10.1)	(15.3)		80%	内) N6/0灰～N8/0灰白 外) N5/0灰～N8/0灰白 断) N8/0灰白	内面～外面体部にかけて回転ナデ、外面体部～底部にかけて回転ナデ後ヘラケズリを施す。口縁部～肩部にかけて凹線文を9条、肩部にヘラ状工具で付けたキザミメを3条施す。	一部反転復元
37	図版8	16	瓦器 椀	f10	214	14.7	4.6	高台径 5.1	98%	内) N3/0暗灰 外) 7.5Y8/1灰白～N6/0灰～N3/0暗灰 断) 7.5Y8/1灰白	内面は磨減のためやや不明瞭、幅0.15cmの密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は体部～底部にかけてユビオサエナデを施す。高台は貼付け時にヨコナデを施す。外面に重ね焼痕。	

第V章 まとめ

これまでに調査が行われた、一般国道24号和歌山バイパスの建設に伴う発掘調査では、縄文時代～中世にかけての集落や墓などが数多く発見されており、県道และ歌山貝塚線の工事に伴う発掘調査では、弥生時代～中世にかけての集落や墓などが発見されている。これらの調査地の範囲が集落の中心地であったと想定され、今回の調査区南東部の高まりは、集落の存在した微高地の縁辺部にあたる場所と考えられる。出土遺物の量が少ないのも、集落の中心からやや離れているからであると考えられる。

第2遺構面で検出した東西に延びる溝(遺構202・203・205・212)は、古代の水路の用途が考えられる。県道และ歌山貝塚線の工事に伴う発掘調査でも、同方向に延びる数条の溝が検出されており、微高地の縁辺部に沿うように延びていたと想像できる。大型土坑(遺構204)は、溝との重複関係が平面で検出できないことや、基底部の深さがほぼ同じであることなどから、用水を一時的に溜める池であった可能性が考えられる。

調査区付近が水田となるのは中世前半で、それ以降、近・現代まで連綿と水田として推移していることが窺える。

また、遺跡の北側を古代の南海道が東西に通ると推定され、遺跡付近を熊野参詣道が南北に通るなど、川辺遺跡の周辺は交通の要衝であった。

1. 発掘調査前現況
(南東から)



2. 第1遺構面全景
(西から)



3. 第1遺構面南 鋤溝
(北西から)



1. 第2遺構面全景
(西から)



2. 遺構 201 断面
(南から)



3. 遺構 202 断面
(東から)



1. 遺構 203
(西から)



2. 遺構 203 断面
(西から)



3. 遺構 204-1 断面
(西から)



1. 遺構 204-2 断面
(西から)



2. 遺構 205 西壁断面
(東から)



3. 遺構 207 遺物出土状況
(東から)



1. 遺構 208 遺物出土状況
(南から)



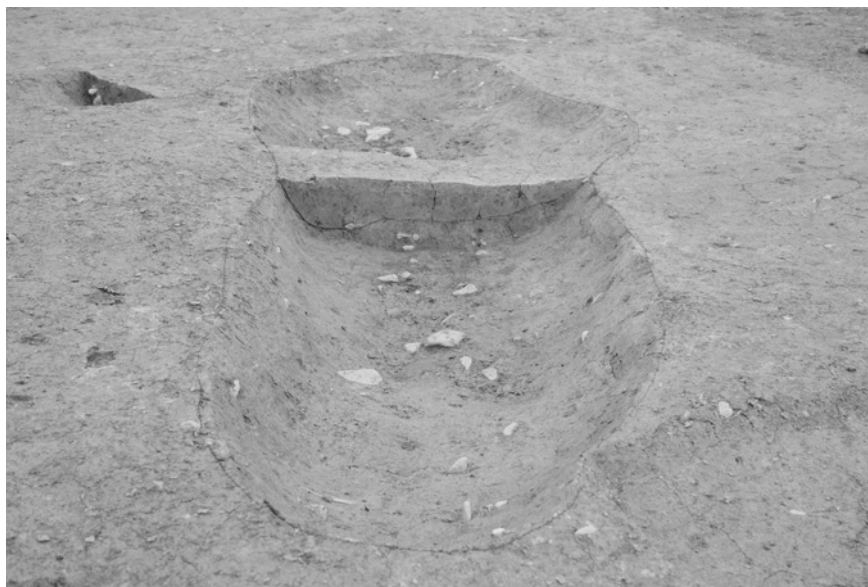
2. 遺構 214 遺物出土状況
(西から)



3. 第3遺構面全景
(西から)



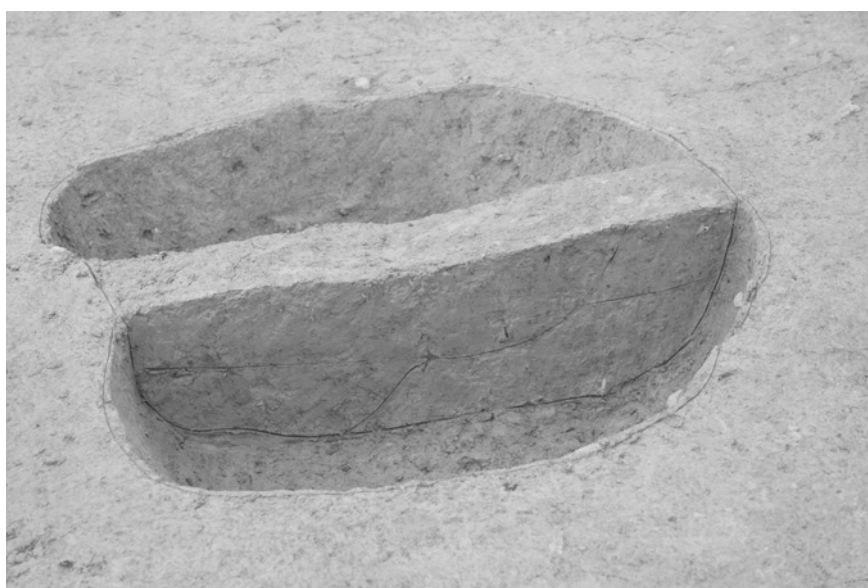
1. 遺構 307 断面
(東から)

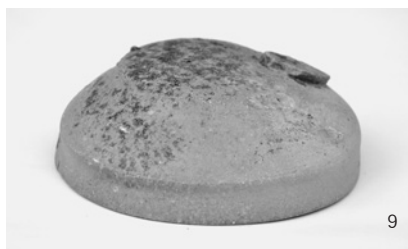


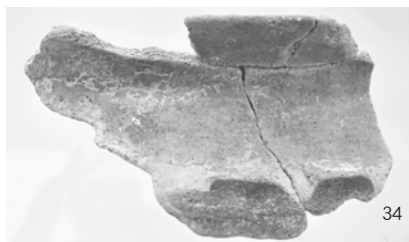
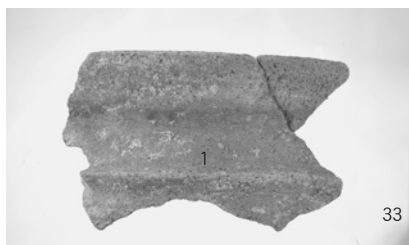
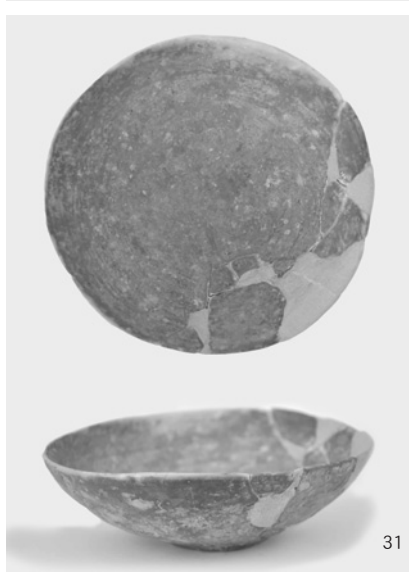
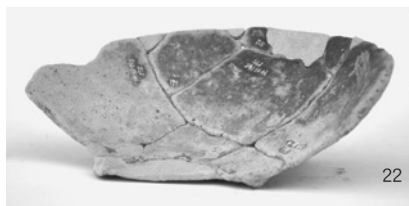
2. 遺構 321 断面
(東から)



3. 遺構 323 断面
(東から)







報告書抄録

ふりがな		かなべいせき						
書名		川辺遺跡						
副書名		都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書						
編著者名		山本 光俊・小林 充貴						
発行機関		公益財団法人 和歌山県文化財センター						
所在地		〒 640-8301 和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1 TEL 073-472-3710						
発行年月日		西暦 2015年 10月 31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かなべいせき 川辺遺跡	わかやまし 和歌山市 ふじた 藤田	30201	145	34° 15′ 47″ 付近	135° 15′ 47″ 付近	2014. 10. 29～ 2015. 02. 13	820㎡	都市計画道路 西脇山口線道 路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
川辺遺跡	集落跡	古墳～鎌倉 中世～近世	土坑・溝 溝		須恵器・土師器・瓦器・土釜 土師器・瓦器		特になし	
要約	都市計画道路西脇山口線道路建設に伴い面積820㎡を調査した。検出した遺構は、古墳時代から鎌倉時代にかけての土坑・溝、中世から近世にかけての鋤溝を検出している。調査区南東部が一段高くなっており、遺物が比較的多く出土する。調査区南東部は微高地の縁辺部で居住域は南東側に広がっていたと考えられる。調査区のほぼ全面は居住域に接する生産域（水田）であったと考えられる。							

都市計画道路西脇山口線道路建設に伴い面積820㎡を調査した。検出した遺構は、古墳時代から鎌倉時代にかけての土坑・溝、中世から近世にかけての鋤溝を検出している。調査区南東部が一段高くなっており、遺物が比較的多く出土する。調査区南東部は微高地の縁辺部で居住域は南東側に広がっていたと考えられる。調査区のほぼ全面は居住域に接する生産域（水田）であったと考えられる。

川辺遺跡

—都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書—

2015 年10月31日

編集・発行：公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1

印刷・製本：初田印刷株式会社

〒640-8137 和歌山県和歌山市吹上 5-4-40